



4. 口腔粘膜炎・口腔乾燥の原因・・・全てが明らかにはなっていません

抗がん剤が口腔内へおよぼす影響については、全てが解明されてはいませんが、研究が進み、わかってきたこともあります。ここでは、殺細胞性の抗がん剤と分子標的型の抗がん剤(21～26 ページ参照)に分けて説明します。

<殺細胞性の抗がん剤>

一般的に抗がん剤は血流が豊富で細胞分裂が盛んな細胞に作用をします。消化管の一部である口の中の粘膜の細胞は、細胞分裂が盛んな細胞であるために抗がん剤の影響を受けやすく、また唾液腺(だえきせん)は血液から唾液を生産しているため血中の抗がん剤の影響を受けやすいです。その結果、口の中の粘膜のダメージは「口腔粘膜炎」に、唾液腺細胞のダメージは「口腔乾燥」として症状が現れます。

<分子標的型の抗がん剤>

分子標的型の抗がん剤は、特定の標的を持った細胞にピンポイントで攻撃するタイプの薬で、近年盛んに開発されてきています。特定の標的をもつ細胞にのみ攻撃をするので、副作用も殺細胞性の抗がん剤と異なると言われています。このタイプの抗がん剤でも口腔粘膜炎が起こることがありますが、その原因はまだ解明されていません。

なお、同じ「口腔粘膜炎」でも、殺細胞性の抗がん剤と分子標的型の抗がん剤では症状の出方が異なるという大きな特徴があります(下の写真参照)。

《抗がん剤の種類による口腔粘膜炎の症状の例》



殺細胞性の抗がん剤(代謝拮抗剤)
による口腔粘膜炎



分子標的型の抗がん剤(mTOR阻害薬)
による口腔粘膜炎

<免疫力の低下により発症する口内炎>

抗がん剤治療を受けて、体の免疫力が低下することで発症する口内炎についても知っておくことが大切です。代表的なのはウイルス感染による「ヘルペス性口内炎」とカビの一種であるカンジダ菌が原因の「カンジダ性口内炎」です。これらの口内炎はいずれも特効薬があり、薬で治すことができます。

《ヘルペス性口内炎》



粘膜に複数の水疱(すいほう)ができ、破れて潰瘍(かいよう)をつくります。刺すような強い痛みが特徴です。

《カンジダ性口内炎》



口腔内全体に白い苔のようなものが付着しています。ピリピリと弱い痛みと味覚異常が特徴です。

※ この小冊子では、抗がん剤で起こるものを「粘膜炎」、細菌やウイルスで起こるものを「口内炎」と呼んで区別しています。



《がん免疫治療薬と口腔粘膜炎・口腔乾燥》

がん免疫治療薬(27 ページ参照)による治療は、抗がん剤治療の中では、新しい治療法です。

この薬は、直接がん細胞に作用するわけではなく、自分の免疫細胞が、がん細胞を排除しようとする働きを助ける薬です。

自分の免疫細胞の暴走によっておこる自己免疫疾患で口にトラブルが起こるように、免疫治療薬の副作用として、口腔粘膜炎や口腔乾燥が出現します。

出現頻度は、1～10%程度とされています(薬の種類によっても異なります)が、症状が出現する時期は予測困難ですので、普段からの口腔ケアはとても大切です。また、がん免疫治療薬の副作用は、稀に重症化(全身の皮膚がただれる症状が起こる)することがあり、口腔粘膜炎の症状が最初のきっかけになることがあります。がん免疫療法中は、口腔内を注意して観察し、症状があったらすぐに医療者に伝えるようにして下さい。

